

## 保育内容の基礎理論(2)

—「名のない遊び」の研究に関する5年間の総括—

塩川 寿平

### 目 次

I	はじめに	17
II	直接処遇技術を問う	18
III	「名のない遊び」の実際, 新しい事例の追加	19
IV	5年間の研究経過・考察の推移	48
V	「名のない遊び」の研究総括	51
VI	むすび	54

### I はじめに

いま, さらに, その重要性を感じている。本稿が, 子どもの人格尊重を守る研究に, 一層, 成長したと考えるからである。

子どもの人格を認める時, 子どもの生活は, 子ども本人の意志で決定され創られる。そこに, 必ず, 「名のない遊び」が存在する。

本稿は, 子どもの人格が, さながらに受け入れられた姿として, 「名のない遊び」の重要性を説いてきた。それは, 人格尊重の証明であり, 子どもが主権者として自ら選んだ生活なのである。

こうした提案と証明に, 本稿は, 一定程度成功したと思う。第一歩は, 淑徳大学研究紀要第12号であるが, 昭和52年12月10日脱稿, 昭和53年3月発行となっているので, 5年の歳月が経過したことになる。

この間, たえまなく日本保育学会, 日本児童学会, 保育専門誌, 各種の保育者研修会, また, 大学における講義・演習等の機会をとらえて検証を積み重ねてきた。そして, いま, 結論を出す自信を得たので, 総てをまとめて整理し, 新しい見解を加えながら, 「名のない遊び」の研究の総括を行う。

ここに, 保育内容の基礎理論の一つ「名のない遊び」の研究を完了する。

## Ⅱ 直接処遇技術を問う

子どもを愛するということは、子どもの人格を尊重するということにほかならないが、それは、子どもの生活は子どもの手に戻してやるということである。子どもの手に戻った生活（遊び）の象徴的形態として、著者は「名のない遊び」を取り出し、その消滅を恐れ、その重要性から保護を主張するのである。いま、子どもの生活は子どもの手に「戻してやる」とか、「保護を主張する」という語句を、あえて使用したが、これは著者の認識を示すものである。いまや、子どもの生活は大人の手にあると著者は認識するので、子どもに「戻してやる」という表現をとったのである。

また、著者も、その全てを否定するものではないが、大人の側からの目的的な合理化による、「家庭にあっては目的のしつけ」が、そして「保育所および幼稚園にあっては目的カリキュラム」が、子どもの生活時間の多くを占めていると考えている。そこで、著者は、こうした大人の側からの「やらせの生活」に対して、危機感を持っている。それ故に、「名のない遊び」の「保護を主張する」という、願いを込めた表現をあえてするのである。

こうした認識に立って「直接処遇技術を問う」というタイトルをつけたわけであるが、それは画一的で形式的な目的的一斉保育に疑問を持ち、その本質を問うということである。著者の経験からすると、保育界全体を見て、より多くの保育所および幼稚園で、目的的一斉保育の傾向が見られる。著者が、本稿で問い直し、追求する方向は、子どもを独立した人格としてみることに始まって、子どもの頭で考え、子どもの身体で挑戦し、子どもの喜びで評価して暮す、そのような保育の建設である。著者は、それを自由保育と呼び、子どもの人格尊重の象徴として「名のない遊び」を取り上げ、ことさら保護を主張するのである。

いま、どうしてこれほど子どものテンポで暮すことが難しくなったのか。乳幼児においてさえもである。それは、口先では子どもの人格尊重を言いながらも、大人たちは、大人が必要だと考える目的に向って、子どもの生活を完全に管理してしまったからである。

理由は、幾つでもある。結論から言えば、子どもの人格についての「無知」と「見識のなさ」である。「無知」というのは、直接処遇技術の欠陥にある。小学校以上の学校教育で使われる教科教育法の、教材論にとらわれすぎ、そこで使われる系統学習の考え方を唯一科学的教授法としている誤りである。

系統学習は確かに、教材の理論的・科学的系統化ではあるが、子どもの興味に基づく教材に対する動機づけとは必然的關係を持たない。

著者の「名のない遊び」に含まれる主張は、もう一つの別の系統学習の設定である。これは発見と呼んでもよい新しい視点である。すなわち、子どもの興味活動に基づく、試行錯誤の繰り返しかえしから気付く、教材の理解のしかたである。出発点が、子どもの動機づけに置かれている系統化なのである。

教材の価値と子どもの動機を結ぶ時、その二点のどちらから出発するのかということであるが、「名のない遊び」は子どもの動機からの出発であり、前者のいわゆる系統学習の逆の形である。本稿の使命の一つは、ここにある。子どもが興味を示す、動機づけの確かさこそが人格尊重の保育である。すなわち、子どもを主人公に置いた保育を創造しようということである。こうした直接処遇技術を見直すことであり、その方法論の確立である。この確立が不十分であることが、「無知」と述べる故以である。

次に、「見識のなさ」についてであるが、保育界の体質にある。あまりにも楽観的な早期教育や才能教育の取り入れである。善意にとれば、発達の促進の信奉ということであるが、その裏は、経営重視からくる、教育産業の企画に流された、主体性を失った保育界の姿である。

発達を無視した、教え込みであり、訓練主義である。子どもが主人公となって、考え、工夫して創造する保育がない。大量の概念的教材、ワークブック等の使用である。小学校以上の学校の授業風景とどこが違うのだろうか、考え込んでしまうような保育所や幼稚園がみられる。保護者の側にも責任がある。受験地獄という社会問題を持つ、日本の中で教育を考える時、保護者の気持も理解できるが、「早期に」あるいは「才能を」教え込むという行き方について、ほとんど沈黙し、むしろ賛成の傾向を示しているからである。なお、いま、乳幼児人口の減少から、保育所および幼稚園の側が、園児募集の上から、一層、保護者に迎合した形で、保育内容を定める傾向があるが、子ども無視もはなはだしいものであり、真に慎しむべきことである。

いまこそ、保育界は見識を示さなければならない。もし、経営面重視のあまり、保育の本質を見失ったり、不必要なまでの競争原理にもとづく教え込みとテスト方式を幼児教育と思いつくようなことがあれば、長い将来において必ず、保育界は国民から軽蔑され、見棄てられるであろう。

保育が不滅であり、国民から尊敬され、末永く支持される為には、困難な時代にあっても、子どもを見据え、子どもの人格を守りぬき、確かに、子ども愛していたという証しを立てることである。

保育界は、いまこそ、見識ある行動をとらなければならない。著者は、不滅の保育として、「名のない遊び」のある保育を提唱するのである。

### Ⅲ 「名のない遊び」の実際、新しい事例の追加

この5年間、「名のない遊び」の収集に努めてきた。ここでは、未発表のもの内、特に、以後の考察に必要と思われる事例を提出する。

提出者は、著者の保育原理を受講する淑徳大学社会福祉学部の学生を始め、著者が非常勤講師として講義する千葉大学教育学部学生、および、夏期集中講義を受け持った岡山大学教育学部学生である。さらに、一般保育者からのもの。そして、著者自身の収集である。

まず、提出者たちは、この課題に取り組みながら、何を感じ、何を考えたであろうか。

①「名のない遊び」のレポートが出された前後で、私たちの子どもを見る目が変わってきている。

②今まで、気にもとめなかった子どもの行為も、関心を持って見るようになった。

③無視、あるいは、とても低い評価しか与えていなかった、ちょっとした遊びも見のがせなくなった。

④忘れていた子ども心呼び戻してくれた。

⑤子どもの遊びを認める部分が多くなった。たとえば、汚いあそびとか、いたずらなども。

⑥そこにはすばらしい子どもの創造の世界が展開されているということが、実感できるようになった。

⑦大人にとっても意味のあることである。

⑧最近の子どもは遊ばなくなったと言われるが、そんなことはない。子どもの生命力あふれる遊びに何回か出会った。

⑨自由の大切さを知った。ほんとうによく遊ぶ。

⑩自分たちが、保育者になったり、母親になったりした時、「名のない遊び」を暖かい目で見守ってやりたいと思う。

以上のような感想が多く報告されている。

## 1 淑徳大学学生の提出事例(1982.7.2)

### (1) 小須田 芳 枝

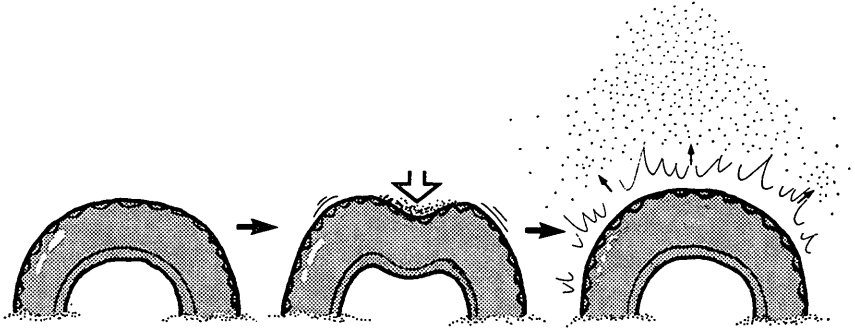
私が保育所へ実習にいった6月のある日のことでした。3歳児から5歳児までが園庭で自由遊びをしていた時のことです。私はタイヤが半分うめこまれ、8つならべてある固定遊具のところで、3歳の女の子がタイヤの上をピョンピョンと跳び渡るのを、手をつないで手伝っていました。そのまわりでは「ヤッテ ヤッテ」「ワタシ ガ サキヨ」と1人では跳び渡ることのできない3歳や4歳の子ども達が叫び、また、5歳のおにいちゃんは「ネエ ミテヨ ボク ヒトリデ デキルヨ」と自慢げに言うのでした。そうしているうちに、5歳の男の子が一番端のタイヤの上でピョンピョン跳びはねていることに気がつきました。あの子もやりたいのかなと思いつつながら何気なく見ていました。男の子は勢いよく両足をそろえて跳びはねました。するとやわらかいそのタイヤはグシャとつぶれてしまったのです。男の子はニヤッと笑って、たぶんつぶれたことがおもしろかったのでしょう。そして横に跳びおりました。するとタイヤが元へ戻ろうと、徐々に浮き上がり、パーンとはねかえたのです(音はしませんが)。その時、男の子の靴の裏についていた砂が、タイヤの上ののっけていて、タイヤのはねかえりと同時にまわりにちらばったのです。それを見ていた男の子はびっくりして、しばらく立っていました。そしてもう一度タイヤの上ののっけて、今度はタイヤを思いきりつぶして、同じことをくり返したのです。そして3回目、今度はタイヤをつぶすとまん中のへこんだところから足を片方ずつ

ずらし、両側の山になっているところに足をかけました。そして近くにいた4歳と5歳の男の子に「ネエ ココ(タイヤが谷になっている部分)ニ スナ イレテヨ」と頼んだのです。頼まれた友達は、何だろうという様子で、それでも言われた通りに砂を手で入れると、「モウイイヨ。イイカ ミテテミ」と言うと、さっそうとタイヤから跳びおりたのです。するとタイヤはだんだんともち上がりパーンとはねかえって、砂の雨を降らせたのです。2人の男の子は砂をかぶりながらも、すごいという顔で「ワア ハナビダ」と大声で叫びました。本人は満足げにもう一度始めました。私は、これはすごい発見をしたなと思っていたら、男の子は私を呼びに来ました。そしてまわりにも自慢げにふれまわり、見物人は7、8人となったのです。一度見ると他の子もやりたくて仕方がないのですが、あいにく他のタイヤは硬かったり、体重の軽い子はつぶすことができないのです。何回かやるうちに私が「他の花火はないの？」って聞くと、まわりにいた子どもたちから「ハッピー ノ ハナビ」「イシ ノ ハナビ」「ボール ノ ハナビ」など様々なアイデアが浮かび、注文を受けてすべてやって見せてくれました。しかし、最終的にはやはり砂が一番おもしろいのです。そして、砂も少ない方がよく飛ぶことを発見したのです。まわりでは砂入れ専門にやっている子、砂をかぶりたがる子など、そこからも色々な遊びを始めたのです。この“タイヤの花火”は子どもが名付け、継続的に遊ばれるようになったのです。園庭での自由あそびの時は、必ず花火をやっている子がいます。3歳児など自分では

(1)-1 図



(1)-2図

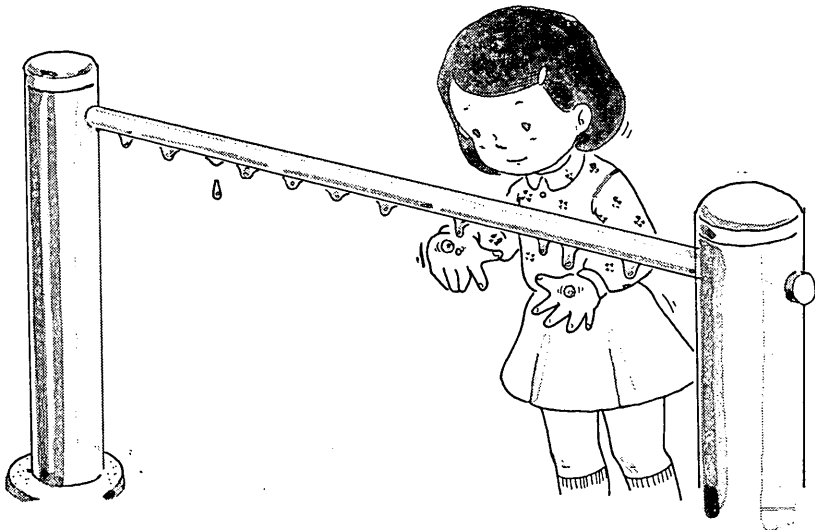


つぶせない子もやりたがります。そうすると自分はもう満足したおにいちゃんやおねえちゃんが、つぶしてあげ、小さい子をタイヤの上ののせてあげると、砂を入れてあげるのです。ところが小さい子は、とびおりと逃げることに夢中で背をむけている間に花火は終わってしまうのです。そんな風景を見ると、思わず笑ってしまいました。

## (2) 新井由美子

3, 4歳の頃、それから、小学生の頃にもしたが、鉄棒とか、物干しざおについている、朝露や雨のしずくを、手のひらや腕にそっととって遊んだものだった。手のひらにしずくをのせると「見て見て、手に豆ができた。」とか、指の上だと「真珠の指輪してるんだよ。」と腕の上にたくさんをのせると「水疱瘡になっちゃった。」とかいったものだった。このようにしずくはのせる場所によって、豆になったり、真珠になったりした。このしずくを手のにせる時の表情は、何か大切なものであるかのように慎重にそっとのせるのがコツなので、やっている本人の顔は真剣そのものである。この遊びは、誰かがやっているのを見て、自分もやってみた

(2)図



のだが、それ以来、鉄棒や物干しにしづくがあると、必ずといっていいほど手の上にのせたものだった。それは、子ども心に、日の光を受けてきらきらと輝き、ちょっとゆらしただけでこわれてしまうしづくに感動したからだと思う。

- (3) ※[特記]ここに学生の事例ではないが、特別に、本学教授の笠井清先生より、おかりした文章を、<sup>(1)</sup>謹んで掲載させていただく。

水玉が、不思議なほど同じように人の心を引くことを知った。子どもたちの姿が目に浮ぶようであり、今日のことのよう、時の経過も忘れさせる。それにしても、あざやかな「名のない遊び」であり、どうしても新井の経験と逆記したいものであった。

「輝きを失った水滴」 <sup>(1)</sup> 笠井清

紅々と照る秋の夕日が幼い兄弟の横顔にさしている。もう秋も半をすぎ一寸寒気を感じる頃、微風が雨上りの水溜りをきらきらとうろこの様に光らせてから兄弟の頬に当たっていた。前には竹の垣根、向こうには水溜りに映ってリヤカーが置いてある。母屋は野菜を切る音、夕げの煙は納屋の藁屋根にひくくたどい始めて、いかにも物静かな裡に先程から2人の兄弟が彼等の掌に、垣根の竹についた美しい玉の様な水滴を取りながら楽しんでた。離れに老眼鏡を低くかけて、つぎ物をしているのはこの兄弟の祖母らしい。兄弟は生き物でも捕えるかの様に眼を丸くしてそっと近づいては水滴を取っている。やがて兄弟は水滴が夕日に照らされて虹の色に輝くのを見つけた。「トシオ、こっちだ。早く早く。」こう叫ぶのは兄らしい。兄といっても齢は2つ以上違うとは思われない。2人共緋の着物を着て鼻汁を眼の近くまでなすり上げている。兄弟は輝く水滴を何か神秘的に感じている様に見えた。水溜りをまわって走り寄る弟に“静かに!”と云わんばかりの兄の顔はひきしまつて真剣だった。見失ってはと心配そうな恰好で兄弟はこっそり何か囁き合っている。兄弟は各々別の方向から近寄っては輝く水滴を生捕りにしようと思ったらしい。しかしその時沈み行く太陽の光を弟の体でさえぎってしまったために水滴は輝きを失ってしまった。兄はきょろきょろと見つけている。兄弟は手まねで何か合図している。その瞬間弟が一寸動いた。兄はすかさず輝く水滴を見つけてそれを手に移した。兄弟は顔を見合せ微笑み合って、すぐ弟は水滴を載せた兄の手を支えて、小走りに離れの祖母のもとに行った。「ばあや、これこれ。」弟も得意になって、「これ、ばあや。」と呼びかけている。

祖母は何の事かわからない。兄弟の方は一層真剣である。しかし、もう家の中では輝く筈がない。もはや輝きを失った水滴を、なおも一生懸命見つめる兄弟の顔には、幼い純情さがこもっていた。

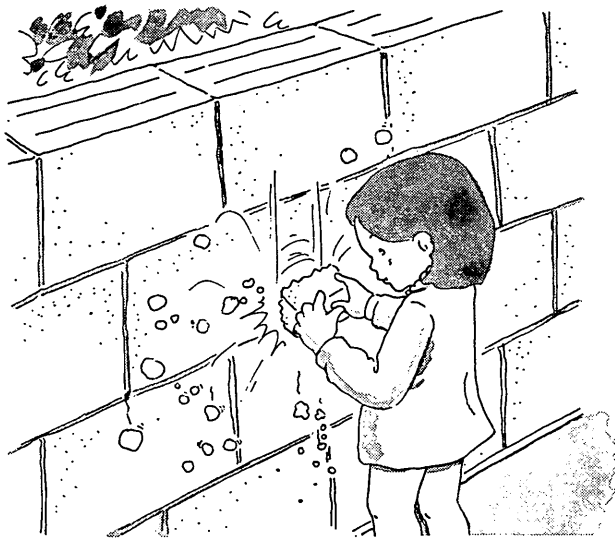
(4) 長谷川 和 美

坂になっている道の端で、4歳の女の子が1人、ブロック塀に向かって一生懸命手を動かしていた。女の子の手の中には、きっと電気製品か何かに付いていたものだろう、ハッポウステ

ロールがしっかりと握られていた。そして、このハップウスチロールを、ブロック塀にこすりつけているのである。すると、その真白い塊はあっという間に細かくされて、この初夏の陽差しの中を独得な動きで舞い散るのだ。女の子の視線は、風にたわむれるこの小さな動的なものに釘付けである。そしてこの小さな生き物は、空中をひと泳ぎしたあと道路で一休みし、そしてすぐに次の風に乗りました舞い踊るのだ。そしてその度に、その子の視線を飽きさせない。そればかりか、いつまでもその子を引きつけるのだ。女の子は得意顔で、そして本当に心からこの遊びを楽しんでいるのである。この遊びは、私が偶然この風景に出会う以前から続けられていたのだろう。女の子の辺りは、その子の手でもって新しく作られた白く小さいものが、すでにたくさん散っていた、この遊びは、その塊がその子の手におえなくなるまで続き、そして最後に残ったその塊を投げ上げて終わった。しかし、女の子はその後もしばらく散らかった一片一片のその中にいたが、やがて去り、白い点々だけが残った。

私は、何だか得したような、ほのぼのとした心持ちで再び歩き出した。

(4)図



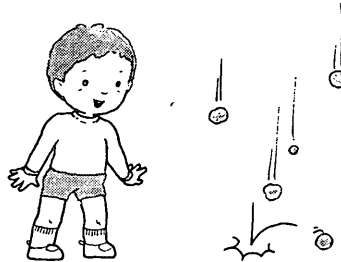
(5) 奈良井 友彦

その子は年は聞かなかったのでわからないが、たぶん幼稚園の年長組か小学校1年生くらいだと思う。その子は地面に落ちている小石を拾い集めては上にほうり投げていた、私は最初は何をしているかわからなかったが、何回か見ているうちに、どうやらどの石が一番早く落ちるかを見ているようだった。1回1回ちがう石を拾い集めては、その様な事を繰り返し一番早く落ちた石を1か所に集めていたそれを行っている間、その子はいろいろと条件を変えていた。小石を多く投げたり、小石と砂を混ぜたり、大きい石と小石をいっしょに投げたりしていた。そのよ

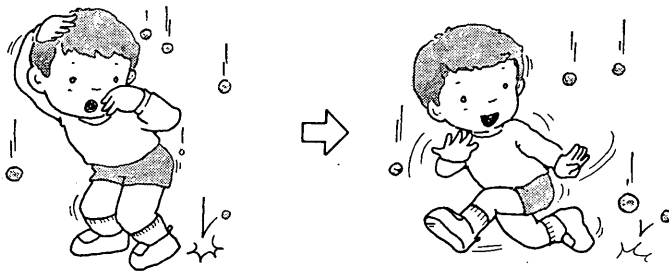


うなことを数回繰り返していた。すると今度は拾い集めた小石を自分の真上にほうり投げた、子供は石が落ちてくるまでにその場からのがれていた。そして今度はその様に小石を避けることを楽しみ始めた。何回か繰り返していると私はその子の逃げ方が最初とかなりちがってきたことに気がついた。最初のうちは、ただ無我夢中に逃げるだけで、小石のゆくえなど見る余裕がなかったが、回をかさねるごとに小石を見る余裕が出てきて、投げた小石のゆくえを見ながら逃げるようになった。それから数分間そのようなことを繰り返したあとぼったりとやめて、もう小石などみむきもせずどこかに去って行った。

(5)－1 図 子供は石の落下順位を見ていた



(5)－2 図 小石からのがれることをはじめた



(6) 田 中 智 美

私の故郷は石川県で、私の住んでいる所は海に近いこともあって、ほとんど砂地です。千葉では九十九里浜に見られるような、さらさらの白砂の土地が多く、私達がよく遊んでいた広場もそういう砂地の広場でした。

私が5歳ぐらいの頃、たぶん季節は土も暖たまって白砂もちらほらと見えていた頃ということで、春から夏の終わりの間のことだったと思うのですが、その広場で私も含め2・3人でめいめい何をするという目的もなしに、日なたぼっこも兼ねて砂をいじって遊んでいた時のことです。手先を動かすのが好きな私は何の気なしに白砂をかき分けて、その下の方の黒い砂（日が当たらないので湿った砂）をほんのひとつまみ手のひらの上にのせ、もう片方の手のひとさし指でその手のひらの上の砂をいじくってまぜていたのですが、そのうちに（たぶん体温と日

光のせいだと思うのですが) その黒い砂がだんだんと白っぽくなってきて、しまいには白砂に変わってしまったのです。まるで、自分が魔法使いにでもなってその魔法の力で黒い砂を白砂に変えてしまったような喜びと興奮でいっぱいになり、すぐにそばにいた友達をつかまえて『ほらっ、私まめんこ作ったよ』(「まめんこ」というのは白砂の別の呼び名であり、私達の地方では主に子供が白砂のことを指してそう呼んで使っていた言葉なのです。私が思うに「まめんこ」というのは、豆の粉のような目の細かい砂というようなことから呼ばれるようになったのではないでしょうか) と、自慢げに見せていたらその子達も目を輝かせて『教えて、教えて』と近寄って来て、今度は3人で「まめんこ」を作り始めたのです。そしてどこからかあき缶を拾ってきて、皆なでその缶の中に自分達の作った「まめんこ」をため始めたのです。最初はなかなかうまくゆかず、欲ばって黒い砂をあまりたくさんせ過ぎると、手のひらの中でうまくまぜることができずに、ほとんどをこぼしてしまったりするので、ほんのひとつまみずつ少しづつ根気よくためていくことにし、そしてそれはその缶いっぱいになるまで続けられました。

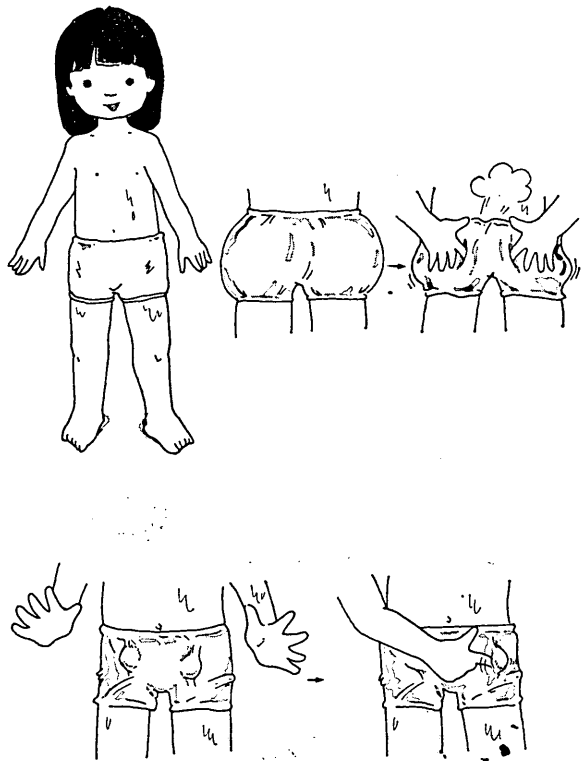
その缶の中の砂はその時の私達にとっては、そのそばにもとからあった普通の白砂などとは全く別の意味を持つものであり、それは自分達が作り方を発見して、自分達で作り出した特別な価値のある「まめんこ」だったのです。

#### (7) 古川 恵美

あれは、私が保育園に通っていたころですから、5歳ぐらいの時だと思います。

うだるように暑い夏の日、水遊びの時間中の出来事でした。その頃水着など着ることはなく、皆普通のパンツ姿でプールの中につかってびちゃびちゃ水遊びをしていました。その日、何かの拍子にパンツの中に空気のあわが入っているのに気づきました。そして、そのあわを押すと横へずれていきます。何回も腰の方に回したり、背中の方に回したり、また、前の方にもどってきたり、同じことを繰り返しているうちにだんだんものたりなくなります。そこで大きなあわを作ろうとして、パンツを

(7)図



引っぱって中に空気を入れると、パンツが風船のようにふくれあがります。ふわふわとしています。ぼんぼんたたくとかかる音がします。強く押しすぎ、布からぐしゅぐしゅと空気がもれ、ゴムからぼこぼこ空気がもれます。それもまたおもしろく何回か繰り返したように記憶しています。そう長く水遊びをしていたとも考えられませんから20分ぐらいでしょうか。

(8) 萬田素子

砂場にできた水たまりで、他の子とは違った遊びをしている子がいる。3歳児の女の子が4人で、水たまりの四方に立ちながら、「ハイッター、デーテ、ハイッター、デーテ」と言いながら、両足をそろえて少しジャンプして、水たまりに入った時の水のはねるのを楽しんでいたのである。たったそれだけの言葉を何度も何度も繰り返し、言葉のように水たまりに入ったり出たりしていた。

そのうちに、見ていておもしろそうだった他の子が来ても、たった50cmあるかないかの小さな水たまりである。多勢ではできないのを心得ていて「だめ!!」と断っていた。

またそのうちに、4人が同時に入ったり出たりするのではなく、向かい合った2人が組になり、隣の2人とはずれて入ったり出たりするようになった。これなら、小さな水たまりも窮屈でなくなる。

しばらくして、水たまりの水が少なくなると、誰とはなしに汲みに行った。子どもたちは、水が多いとはねる水の量も多くておもしろい事に気づき、だんだん水を増やしていった。

(8)図



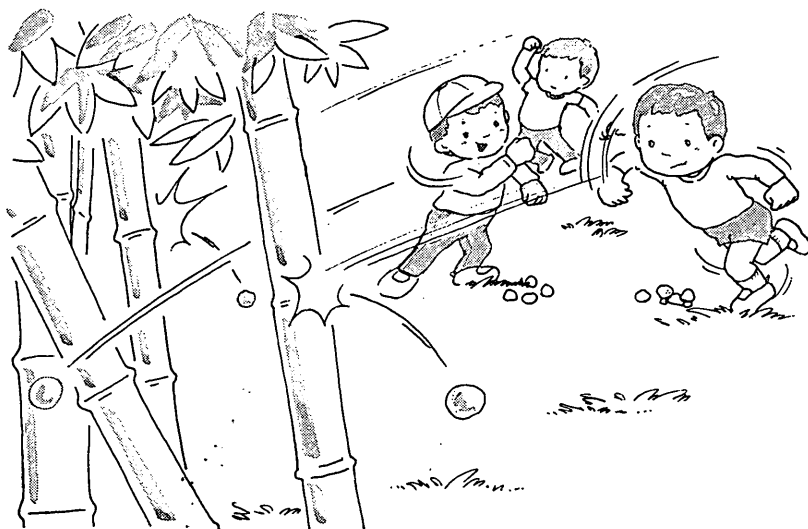
(9) 中野真

私の弟がまだ小学校2、3年生のころ、近所の同じ年ぐらいの子と、数人のグループで遊ぶのが常であった。

ある日のこと、私ที่บ้านにいて、突然、外の方で「カーン」、「カーン」と何かひびく音がした。近所の農家に竹やぶがあるが、その音がそちらの方から「カーン」、「カーン」と聞きなれ

ないひびきをだし、音の数も竹やぶじゅうの竹を連打しているような数である。私はその時、何事かと思ひ窓の外を見た。すると弟を含め数人の子どもたちが、いっせいに竹やぶにむけて小石を投げているのが目にはいった。その「カーン」、「カーン」という竹のなる音は、なんと小石が竹にぶつかる音だったのである。なるほど、竹というのはかなりの音がするものだと、その時はじめて実感したものだが、ここでまたひとつおもしろいことに気がついたのである。というのは、子どもたちはめいめいが自分の目の前の方の竹をねらって小石を投げるわけだが、そのねらった小石がはずれても、後方にぬけた小石が竹やぶの奥の方で別の竹にあたり「カーン」と音を出すのである。つまり自分がねらった竹に小石がはずれても、後方へぬけた小石が別の竹にあたってしまうのである。子どもが石を投げるたびに「カーン」、「カーン」とどこかしらで音がするという現象がおこるのである。

(9)図



## (10) 関 直 樹

あれは私が小学校2～3年生の頃だったと思う。私の郷里は雪国（新潟県・六日町）で毎年2～4mの積雪を見る豪雪地帯である。

私が小学校に入る頃から次第に地水による消雪が一般家庭でも用いられはじめた。まずポンプで水を汲み上げ、それに、パイプやホースに穴をたくさんあけたものをつなぎ、家の回りをぐるりと囲む。それによって吹き出す水が、回りの雪を消すわけである。

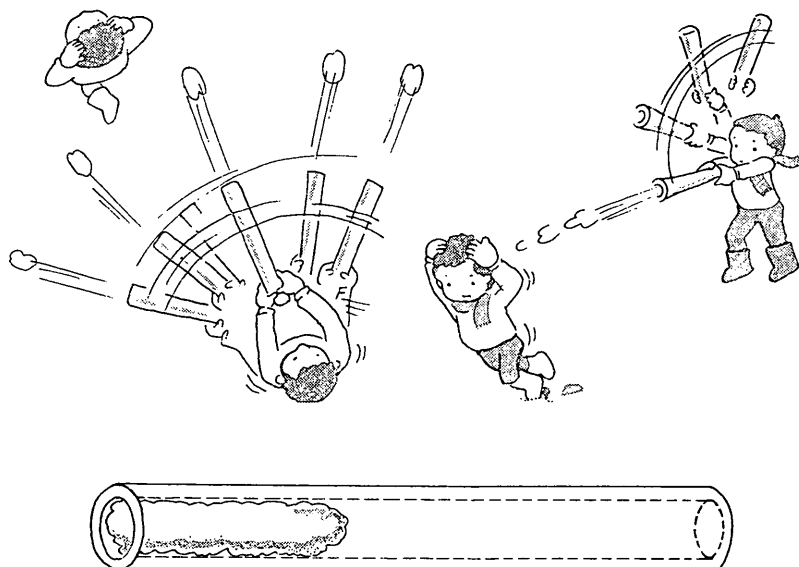
さて、この仕組みは私の父が試行錯誤を繰り返し繰り返し、やっと何とか使えるくらいにしたものである。そして家の物置には、この試行錯誤の過程で生ずる失敗作が山と積まれている。実は、私の「名のない遊び」は、この父のガラクタの産物である。

父のガラクタは、パイプが主であり、その中には、火であぶって曲げられたもの、まっすぐだがひび割れたもの、穴が大きすぎるものなどがあり、父が消雪装置に改良を加えようとした後は、裏庭に全部投げ出してあるのが常だった。ある晴れた日、雪の積もった庭に、またそのガラクタが散らばっていた。

弟が雪の玉を投げた。私は最初、応戦していたが、次にその玉を打って粉々に砕くことを考えた。私はバットになりそうなパイプを手にとり、弟の投げる雪玉めがけ、ブンと振った。その瞬間、パイプの先から、雪の玉が弟めがけてシュシュッととび出たのである。きっと、雪がパイプに何かの拍子に詰まったに違いない。私はもう1度試してみた。雪の中にパイプをブスリと突き立て、抜き、ブン！と振ると、やはり、まるでマシンガンの様に雪の玉が出てゆく。弟も別のパイプを持っている。

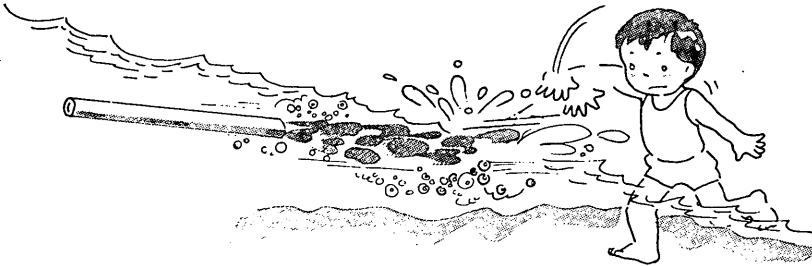
さあ、新しいスタイルの雪合戦がはじまった。もう雪に直接触れることは無いので、手も冷たくならない。私達は新兵器を手に入れたのだ。この新兵器は目的によって弾丸の方向を変えることが出来た。つまり相手に当てることを優先させる場合と、相手により深い痛手を負わせることを優先させる場合の2とおりに使用できるのである。相手に当てることを優先する場合は、5発～10発出る内、1発を当てるのだから、パイプを右から左へ振りきれば、弾丸の発射角度は広がって、目的にかなう。また、相手への痛手を優先させる時は、全弾命中させるのだから、パイプを縦に振り、相手の方へ先が向いた時に、パイプをびたっと止めれば、弾丸はその方向へ集中し、当たらなければ、1発も当たらないが、1発でも当たれば、つづげざまに、全部の弾丸が、同じコースをたどり当たるのである。

(10)－1 図



パイプを使った遊びで、もう1つユニークなものがあるので述べてみよう。パイプを、川べりで捨てた私と近所の仲間は、それを川に投げ入れた。すると、パイプはどろをおしりからはきながら進んでいった。私達は、そのパイプの中に砂やどろがつまっていたからそうなったのだと知り、今度は自分達で、どろを詰め、川に投げ入れて遊んだ。これは私達が潜水艦と呼んだ遊びであった。

(10)ー2 図



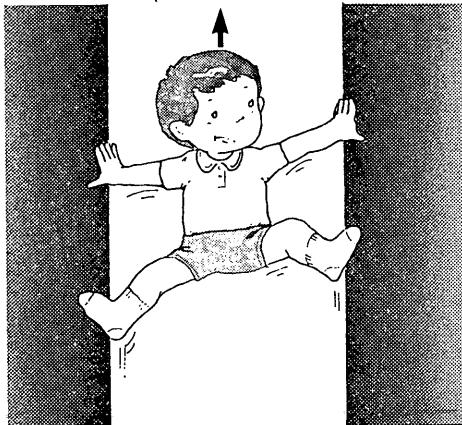
## 2 千葉大学学生の提出事例(1982. 5. 11)

### (1) 中村 葉子

弟が幼稚園に入る前ですからたぶん4歳のころ、私達一家は団地から今の一戸建ての家に越してきました。

ある日私が学校から帰ってくると「おねえちゃん、見てて」と弟がいいます。何をするのかと思ったら何と手と足を使って廊下の壁を昇り始めたのです。それはどうやったかといいますと、廊下のまん中で玄関の方をまっすぐ向いてたち、両方の壁に頭と同じ位の高さのところに

(11)図



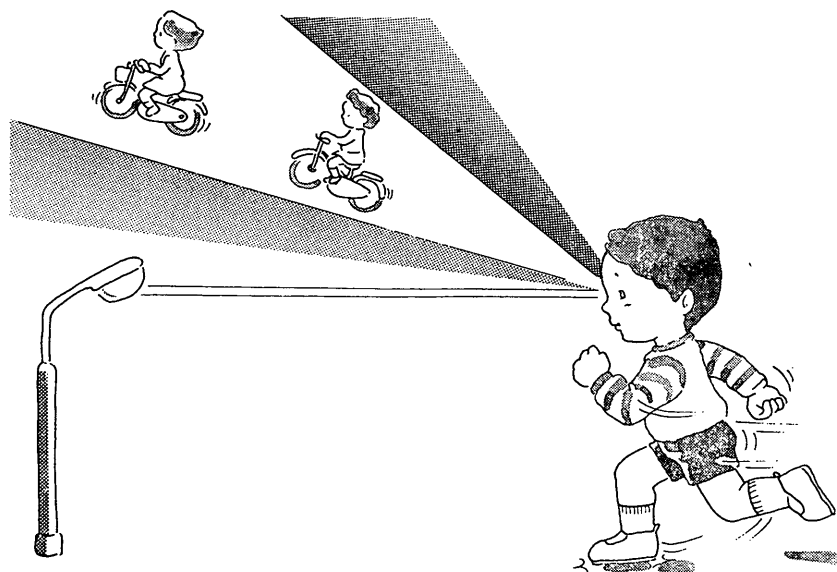
手をペタンと真横につけ、ジャンプして壁の両方に足を八の字にびたっとくっつけたのです。そんなに広い廊下ではありませんから、弟が手足を広げた時の長さがちょうど廊下の長さであったのでできるわけです。私などがやろうとしても足が余ってしまいできません。飛びついた弟はそれから右手、左手、右足、左足と少しずつ上にずらしながら昇っていきます。上の方に昇るにつれ下で見ていた私は不安になってきました。「マータン、あぶないから降りて！」何度いっても弟は平気な顔で、かえってニコニコしながら下にいる私を見降ろしながら昇っていきます。もう何度か昇ってみてあったのでしょうか。ついに天井に頭がつかまりました。弟は誇らしそうな顔で「おねえちゃん、すごいでしょ」といわんばかりです。同じようにして降り、その後も数回同じことをくり返していました。

#### (4) 石井生夫

ある冬の日の夕方、3人の姉弟（上から女、女、男）は、医者からの帰り道、家へと急いでいた。上の2人は自転車に乗り、弟は走っている。もうあたりは真暗であるが、自転車には2台ともライトがついていない。非常に危い状態であることは言うまでもない。弟は幼いながらも、この危険な状態に気づいている。

弟の目に注目してみよう。弟は目を細めている。そして首を静かにゆっくりと左右に動かしている。この弟は何をしているのか。弟は「灯台」になっているのだ。少し遠くの光一街灯、車のライト、ネオン、家の明りーを見つめ、ゆっくりと目を細めていくと、その光源と目の間に光の直線ができる。まるでその光を目で総て吸収するような感じになる。そしてその目を細めたまま首を左右に動かすと、その光も一緒についてくる。その時、その光は自分が光源となり、姉達が自転車で行く前方を照らしているという感じに自分ではなっている。

(12)図



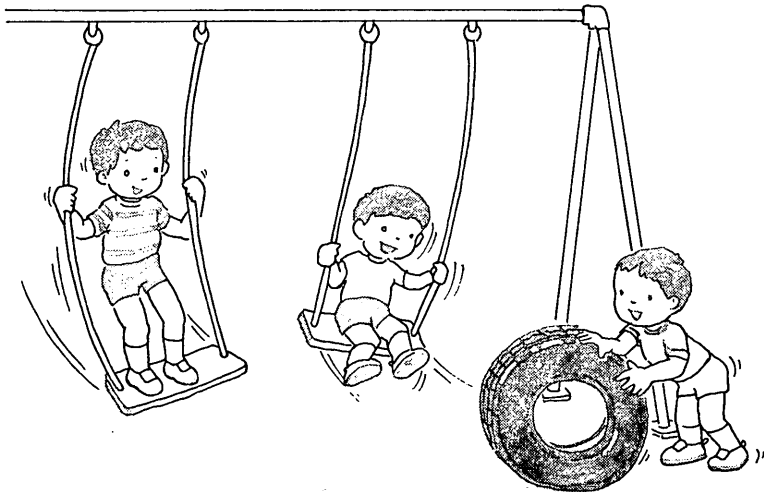
最近、自分の幼いころのある一場面が、急にふとした切っ掛けから思い出し、自分も「名のない遊び」をしていたと思うと非常に感動した。この弟とは自分のことであるが、年は幼稚園のころだったと記憶する。

(13) 久 恒 充 代

6～7歳くらいの男の子3人の遊びです。

その公園には、ブランコが2台有ります。彼らは、それに乗って遊んでいたのです。ところが子どもは3人ですので、1人余ってしまうわけです。その子は、果たして何をしていたのでしょうか。普通ならば、ポケーと自分の順番を待っているところでしょう。しかし、その子は、どこで見つけてきたのか、大型トラック用のタイヤを持ってきました（草原をひとつ隔てて、ガソリンスタンドがあります）。そして、ブランコめがけてころがし始めたのです。タイヤがブランコに当たったら、当てられた子が交替するのです。私は、それを見たときに、「これは、喧嘩になるな」と思いました。ブランコに乗っていた子は、結局、邪魔されたことになるのですから。ところがそのようなことは起きませんでした。当てられた子は、「はい、交替だよ」と言われて、「よーし」と言って、元気に飛び降りました。不思議でした。3人で話し合ったルールでもないのに、すぐに溶け込んでいるのです、この文からでは、ブランコにタイヤをぶつけるなど危い！と感じるかもしれません。が、そこがまた不思議なのです。まず、ブランコをこいでいる子です。この遊びが始まるまでは、それこそ1回転でもしそうな勢いでこいでいたのに、この遊びが始まると、それまでのスピードをおとし、タイヤをかかわすことに熱中し始めました。タイヤをころがすほうの子にも、勢いは、ありませんでした。タイヤが、大型トラック用のものでしたので、子どもには、大きく、重かったであろうし、ブランコのすぐ

(13)図





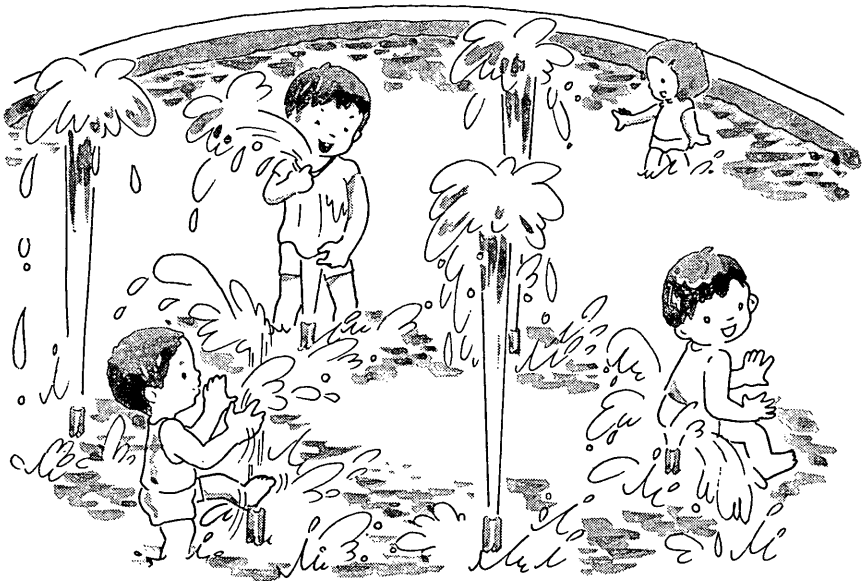
わきからころがしていたので、スピードがつきにくかったのだと思われます。従って、安心して見ていられるものでした。

#### (4) 谷山 知子

この日、森林公園の池の所の方へ行ってみた。ほとんどの子供はいつものように、釣りをしたり、網で何かをとったりして遊んでいた。が、暑い日であったせいか小学校低学年位と思われる2、3人の男の子は、全身をずぶぬれにして池の中で遊んでいた。泳いだり側転をしてみたりして、いわゆる水遊びをしているのである。池と言ってもそれはまさに泥水で、私などの目から見ると汚なくてとても入る気になどならない。ましては顔をつけるなんて考えられない所だ。しかし子供達は、そんなことはまるでおかまいなしというふうで遊んでいた。しばらく経つとその少年達は噴水に興味をもちはじめ、手で水の方向を調節して水のひっかけっこをはじめた。水道の水とはまるで量が違うのもすごいしぶきが飛ぶ。ずぶぬれの子の輪が広がっていく、洋服を着たままやっているので洋服も全部びしょびしょである。が、家に帰る時どうするんだろうという私の心配をよそにみんな楽しそうに遊んでいる。少年達はずーっと水のかけあいをしているわけではなく、それぞれの遊びの中でふとしたことから始める。噴水の上に座ってみたり、手で押し込めてみたり、だっこしたり、けとばしたり、まるで噴水を生き物のように扱っているのがとても印象的だった。

手で噴水を押さえていた2人の少年が、急に自分の着ているTシャツの中に噴水の水を入れることを始めた。Tシャツのおなかにはモコモコ広がり、勢いある水をTシャツでグッと押さえ

(14)図



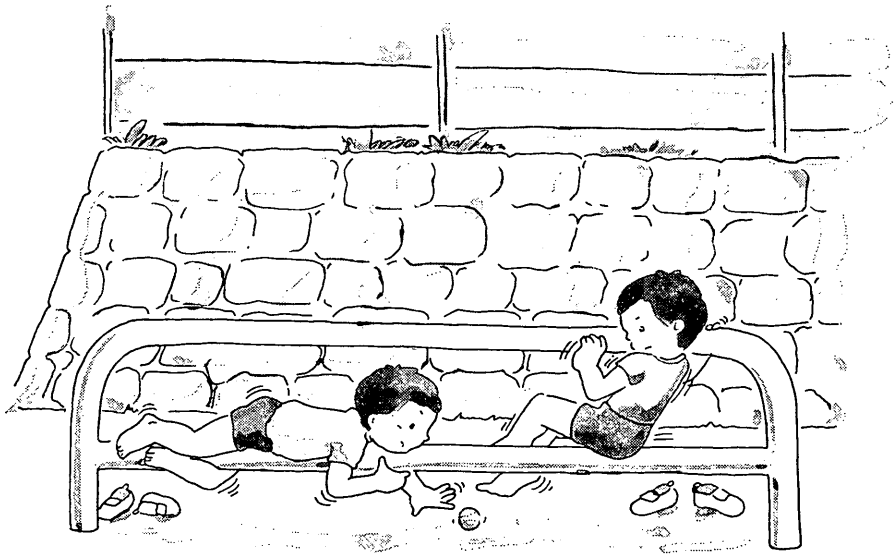
ている為にそのふくらみが上下にモコモコ揺れている。私は、一瞬、Tシャツが破れてしまいはしないかと、つまらない心配をした。その時、水の勢いに耐えられなくなった少年のTシャツの首から水がザーッと噴き上げてきた。少年自身が噴水のようにであった。「ワーッ」と叫んだ少年の驚きの顔は、すぐに喜びの顔に変わった。少年は1つの遊びを発見したのである。

(4) 嵐田 泰子

自動車が入れないようにつくったのか、ガードレールほどの高さの、鉄のさくのようなもの(うまく表現できないので絵を見て下さい)に、のっかっているというよりはむしろ一生懸命つかまっている男の子を二人発見した。この団地内には、登り棒だって、ジャングルジムだって雲梯うんていだってあるというのに、こんな片隅で、何しているんだろう。そう思いながら近づいてみると、一人の男の子が、手に小さなボールを持っていた。そして、それを、鉄さくの反対の端にいる男の子に向かってポンと投げたのである。すると、その子は、その鉄さくにつかまったまま、体をのばして、片手でそのボールを拾い上げた。どうやら地面に足を着いてはいけならしい。だから、何としても落っこちないようにしっかり足をひっかけておいて、手をのばしてボールをとろうとするのである。ボールを拾ってしまうと、今度はその子がボールを投げる番だ。こうして、変わりばんこにボールを投げる、何とかして拾うという動作がくり返された。

あんまり近くにボールを投げれば、すぐに手が届いてしまって、悪戦苦闘せずボールがとれてしまうので、やっている方も見ている方もおもしろくない。そこで、ボールを投げる時は、「これでもか」と言わんばかりに遠くへ遠くへと投げこむようになった。そうなってくると、

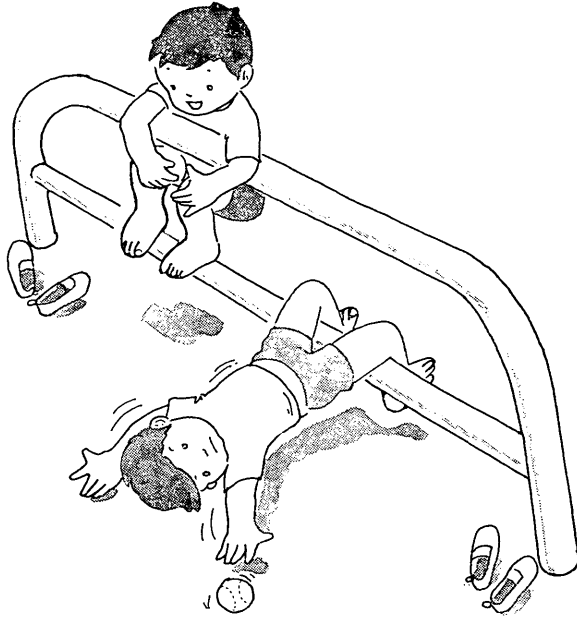
(15)-1 図



ボールを拾う時のかっこうが一段と愉快になってくる。ボールをとる番になると、「ねばるぞー。ねばるぞー」と言いながら器用なかっこうをするのである。しまいには、両足をひっかけておいて、両手を離し、ブリッジをするかのようなかっこうまでした。それも、「こわいよー。こわいよー」と言って半分ふざけながら。

ここではもう、興味を中心は、ボールをとれるかとれないかということよりむしろ、その子がどんなかっこうを工夫してボールをとろうとするかに移っているんだなあと感じた。見ている方の側になると、相手がおもしろいかっこうをするたびに、ケラケラと楽しそうな笑い声をあげ、自分がボールをとる側になると、本当にうれしそうにあれこれかっこうを考える男の子たち。よくよく見てみると、裸足で取り組んでいたものだから、手も、足のうらもまっ黒け。そばに脱ぎすててあった2足の靴が何ともかわいらしく印象に残っている。

(15)－2 図



#### (16) 竹内操子

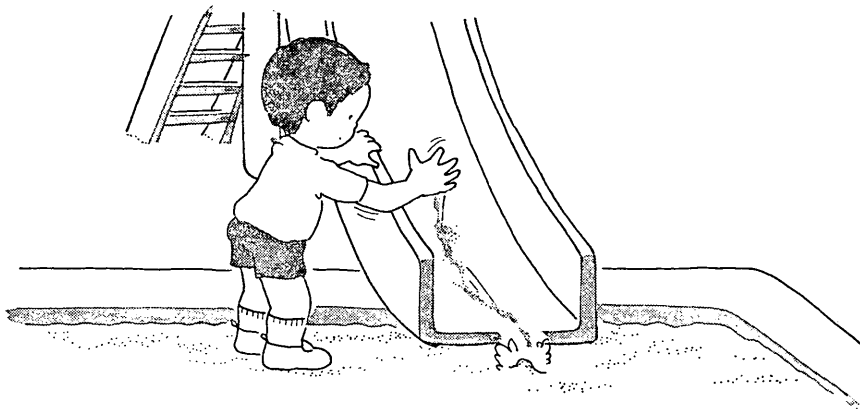
1歳10ヶ月の男の子が熱心に遊んでいる姿を見つけた。すべり台へ、横から砂をさらさら落とし、すべり落ちていくのを見ている。すると、また砂をつかみ、落とす。ここは、すべり台と砂場がつながっている。これを、あきることなくくり返していた。砂の落ちていくのを楽しんでいる様子だった。

その子が帰ってしばらくすると、もう少し小さい、1歳くらいの男の子が来た。歩けるが、不安定でころびやすく、言葉も、まだ喃語の段階だ。女の子のもってきた、プラスチックのス

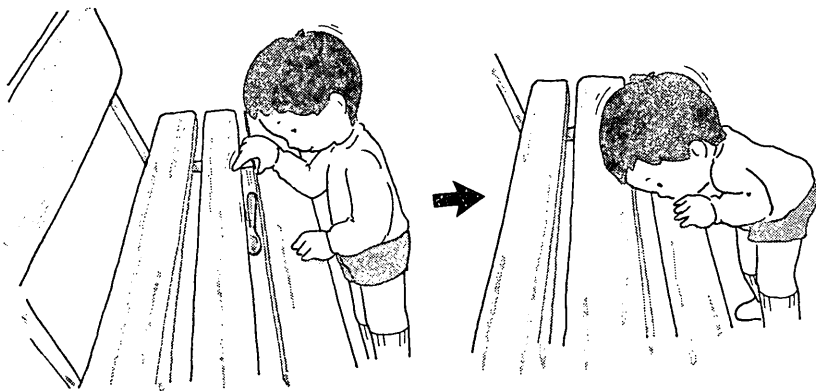
プーンが気に入ったらしく、手にとりながめた後、私のすわっていたベンチの板のすきまから、下へ落とした。すきまの上から落ちるのを見た後、ゆっくり拾う。もう一度くり返し、3度めは落とすままにして、砂場の方へ行ってしまった。

両方とも、落として拾うという動作より、“物を落とす”ということ、また、“落ちていくものを見る”ということ……つまり、“落ちるという現象”に、とても興味をひかれているようだった。これらを見て、思い出したことがある。数ヶ月前、総武線の車中で、お母さんと10ヵ月くらいの子が、むかいに座っていた。何気なく見ていたら、子が鍵を欲しがるので、母親が与えると、すぐ下に落としてしまう。何回かくり返した後、母親がかくすと、ベソをかくので、しかたなくまた渡していたことがあった。

(16)－1 図



(16)－2 図



3 岡山大学学生の提出事例(1980.8.20)

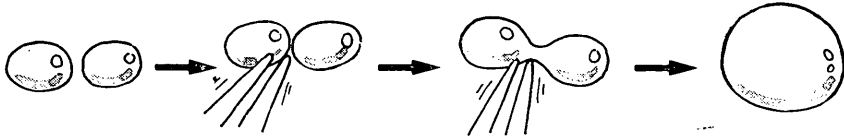
(17) 池田 由美子

8月のはじめにいとこの家に行った時のことである。そのいとは小学校1年の女の子だ。お昼ごはんの時、その子は急に食べるのをやめて、おわんの中をじっと見ていた。何かキレイな物でもあるのかなあ、という程度で大人たちは誰も気にとめなかった。少ししてその子は、お箸でその中をつつきはじめた。そのおわんの中には野菜を煮たものが入っていて、汁も十分あった。その汁には油が浮いていて、油の輪がたくさん見える。その油の輪2個の接点を箸で

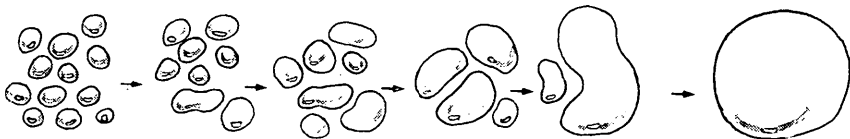
(17)図

A. 輪をつなぐ。

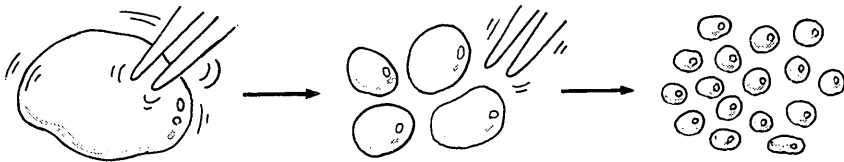
- ① 油の輪がある。      ② 接点を箸でつく。      ③ 接点がつながる。      ④ 何もしなくてもまるい輪になる。つぎ目などない。



B. Aの作業をくりかえし、次第に、輪を大きくしていく。



C. 大きな輪は箸でかきまぜると、再び、小さな輪になる。



つづく、2個の輪がつながり1個の輪になるのだ。しかも、完全にまるい輪になるのだ。そのことが、その子にとってたいへんなおどろきであったようだ。その子は、接点をつく作業がうまくできないようなので、たいへんゆっくり、慎重におこなっていた。だんだん大きな輪ができると、今度は箸で汁を勢いよくかきまぜてやる。すると、大きな輪は小さなしかも完全にまるい輪にわかれてしまうのだ。ためしに、私もまねてやってみるとカンタンに大きな輪をつくることができ、なかなか楽しい。そのうちに、親がはやく食事を終えるように促したが、そのことばなど全く耳に入らなかった。それほどまでに真剣に集中していたのだと思う。つい

に、食事のかたづけをしている親にとりあげられてしまい、その作業は中止となってしまった。しかし、その後も、食事のたびにその子は、この「油つつき」によい材料はないかとさがしていたようだ。

(18) 草野 禎子

8月14日、お墓参りのために親戚の家へ行った時のことです。その家には、1才8カ月の男の子がいました。

そこで1才8カ月の男の子を観察することによって、「名のない遊び」を2つ発見することができました。

まず最初に発見した「名のない遊び」、それは、豆が入っているガラスの入れ物をひっくり返しては、その豆を手で少しずつつかみ、そのガラスの入れ物に「ボン」と言っては入れるのです。だいたい入ったかなーと思ったら、またそのガラスの入れ物をひっくり返し、またその豆を「ボン」と言って入れる。その遊びを5回ぐらいくり返していました。

次に発見した「名のない遊び」、それは、その1才8カ月の男の子が、かごの中に入っているえんどう豆を1つずつ取り出しては、えんどう豆のさやを破り、その中から豆を出していました。私が横に座って見ていると、1つ豆を取り出すごとに「うん」と言って私にその豆を渡してくれました。その遊びを15分ぐらい続けていたと思います。そのえんどう豆むき遊びをやめると、今度は私の手の平からその豆を、自分の手に少しずつ握ってはお母さんの所へ行き、「どうじょ」と言ってはその豆を渡していました。私の手から、お母さんの手への往復は、豆が移り終るまで5回かかりました。私が、「これでもう終わったよ」と言うと、にこっと笑って行ってしまいました。

(19) 拝原 淳子

ひろし君とおばさん（ひろし君にとってはおばあちゃんになる）が、遊びにきた。ひろし君は、5才の男の子で、チョップリ甘えん坊のおばあちゃん子である。

夕方、おばさんとわたしが涼んでいると、ひろし君がやってきた。手には、キャラメルのおまけであろうか、小さな車を3つもっていた。しばらく、その車を畳の上で走らせたり、投げたりして遊んでいたが、車を持っておばさんのそばによっていった。そして、ひろし君は、3つの車を、すわっているおばさんのワンピースに、首のところから投げこんだ。おばさんは、その時、綿のワンピースを着ていて、えりぐりも、広く、ゆったりとしていた。ひろし君は、そのゆったりとした、えりぐりから、手をつこんで、さっき投げこんだ3つの車を探し始めた。「どこかなあ、どこかなあ」と言いながら、キャッキョッキョク笑って、おばさんの胸のあたり、おなかのあたりをさぐっている。そして、見つけると、「あった、あった」と言って、3つの車を手にすると、またワンピースに投げこむ。そして、また、手をつこんでさぐりだす。それを何度もくり返していた。その間、おばさんはというと、ただ笑って見ていたのである。

そして、何度かくり返すうちに、ひろし君のさぐり方も少し変わってきた。ひろし君は、手を

つっこむと、すぐ車が見つかってしまうのが、つまらないのか、最初は、おばさんの背中をさぐり、そして、だんだんと車を投げこんだおなかのあたりをさぐっていくという具合である。そして、やっと探したというような満足な顔を見せて、また、3つの車を投げこんだ。

10回位くりかえしたであろうか、そのうちに、おじさん（ひろし君のおじいちゃん）が迎えにきたので、ひろし君とおばさんは一緒に帰っていった。

わたしは、ひろし君のすぐそばにいたが、ひろし君には、わたしのことなど、目に入っていなかったようだ。ワンピースに車を投げ入れて、それを探しだす、そのことが、そんなに楽しいのかなあと思いながら、ぼんやり見ていたが、ひろし君は、本当に、うれしそうに笑っていた。また、おばさんを見ても、気が短かい人なら、何度もくりかえすひろし君の行動をうるさいと思うだろうに、おばさんは笑いながら、「あったかなあ、みつかったかなあ」などといっている。

わたしは、2人を見ながら、これが、肌と肌との触れ合いというものではないかと思った。ひろし君にとって、ワンピースの中をさぐって、車を見つけ出す喜びよりも、おばさんの胸やおなかに触れる喜びの方が大きかったのではないか。だから、すぐ見付きそうな時も、すぐには、見付け出さず、まず、背中や胸のあたりをさぐっていたのではないかと思う。

おまけの車をワンピースに投げ入れて、それを探すこと、それは、ひろし君のその時、考えだした遊びかもしれないが、その行動の底には、おばさんの肌に触れたいという思いがあったのではないかと思う。子どもは、大人の肌のぬくもりを求めているものなのであろう。何十かの言葉より、一つの抱擁が子どもの心を暖かくする時だってあると思う。そんな子どもの心を自然に受け入れてやっているおばさんもすばらしいなあと思いながら見ていた。

気をつけていないと、見過ごしてしまいそうな、このような名前前のつけようもない遊びを子どもは、数えきれないほど、作りだしているのであろう。それを大人の価値観でとらえ、くだらないからと、やめさせてしまうような心ない大人にならないよう努めたい。

#### ㊦ 小林 隆子

これは、いとこの家で目にした光景である。みんなで昼食をすませ、2才になるいとこだけがテーブルに残ってお茶を飲んでいた。ところがコップが倒れ、お茶がこぼれてしまった。その子はじいっとそのこぼれたお茶を見つめていたかと思うと、手でバチャバチャとたたき始めた。始め片手で、そのうち両手で、「バチャ、バチャ、バチャ」と声に出しながら、気持ちよさそうに、楽しそうにたたいている。「お茶ちょうだい」と言って、もう一度母親についてもらった。飲むのかと思うと今度はわざとこぼした。そして片足までテーブルにのせてバチャバチャとやり出した。すると母親は「お行儀が悪いなあ」と言って足をおろさせた。足をおろした女の子は、今度はこぼれたお茶を両手で、テーブルいっぱいに広げていき出した。最後にはいすの上に立ち上がり、全身で絵をかいているかのようにもうかがわれた。この間30分ぐらいであった。

普段は飲むだけのお茶。それが偶然こぼれたばっかりに、とてもすばらしい遊びを発見できたのだった。人から教えられたり、提供されたりした遊びではなく、自分で発見した遊びだ。それだけに喜びもいっそう大きいようである。最初は、おそるおそるこぼれたお茶に手をのせてみた。そして少しだけ手を上げて、そっとお茶をたたいた。すると小さくバシャッと音がした。冷えた麦茶の感触もいい。そのうち手を高く上げてたたいた。今度は今までよりも大きな音ができる。水もはねる。この子は私にとってもよくなついていて、いつも私の顔を見るなり、「たかちゃん、たかちゃん」と言って寄ってくる。しかし、私はその子の様子をよく見ようとこっそり近づいていっていると、ちらっと私の顔を見ただけで、すぐもとの方を向き、お茶をバシャバシャするのに夢中であった。

始めのうちは、不思議そうに、いろいろと自分で実験をしているかのようにであった真剣な目つきが、次第にうれしそうな目になり、「バチャ、バチャ、バチャ」と声に出しながらたたいていた。そしてその顔にはにっこりと笑が浮んでいた。新しくついでもらったお茶をわざとこぼし、足でもバシャバシャやり出す。手だけではなく、足でやるとどうなるのかためしているのだろう。母親に注意され、足をおろす。これで遊びが終わるのかと思われた。が、そのお茶を両手で広げ出した。両手で、全身を使って力一杯遊んでいるようであった。

そして、となりの部屋で見ていた私のところへやってきた。「何をしていたの」と尋ねると、「お茶、バチャバチャしようたん」と答えてくれた。満足げな顔をしており、精一杯遊んで疲れたという表情もうかがわれた。

付け加えるが、遊びの途中、母親が「お行儀が悪いなあ」と言った。やさしく注意しただけで、テーブルにこぼれたお茶をきれいにふき取って遊びを途中でやめさせたりはしなかった。子どもが夢中になって、熱中して遊んでいることを受けとめて、子どもの納得のいくまでやらせてやっているのだ。この母親は、子どもを認めてやっているいいお母さんだと思った。

#### 4 保育者、および、一般の人の提出事例

##### (2) 夏目 まち子(静岡県浜名郡, 保母79.7.17)

水のないプールに石を投げこむ零君(1歳5ヵ月)

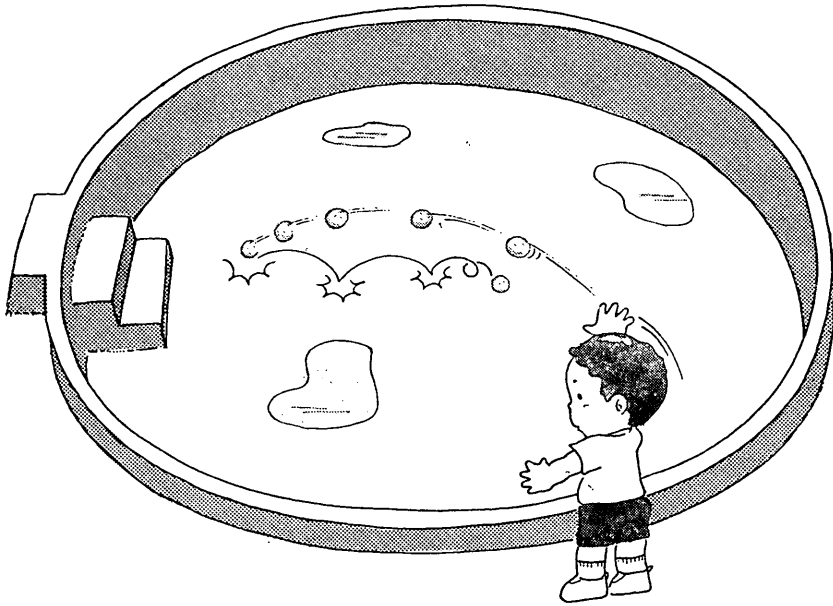
プールサイドにヨチヨチ歩き寄った零君、手に持っていた石を投げ、プールの底を回転しながらころがる石の音に、ニコニコ、そして石を拾いに歩き始めた。

この時私は、プールの底のところどころ水留りのあるのを見つけ、零君がプールの中に入って、足でもすべらせてはと思って、自分の投げた石のころがる音に興味があるのなら、私が石を拾ってやろうと考えた。しかし、落ち着いているので、しばらく様子を見ることにした。

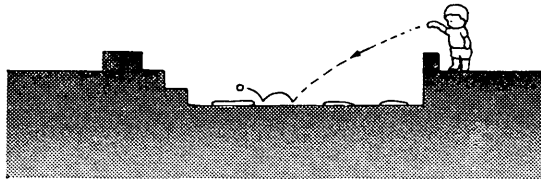
プールの入口までくると立ちどまり、階段を(プールの入口に三段ばかりある)一つ一つていねいに降りていた。そして石を拾うと一段一段上り、先程投げた同じ場所まで歩いてきた。そこで、手にした石を投げ、「コロン コロン」と音を出しながらころがっていく石の動きをジッと見て、石が止るとニコッとして、またプールの階段を降りた。そして、再々くりかえ



(21)-1 図



(21)-2 図



し、投げる。しばらくして、「れいくん」と彼を呼ぶお姉さんたち（五歳児）の声に、プールの中に投げこまれた石をそのままにして、保育室の方へ零君は行ってしまった。

(2) 森 隆 子(徳島県徳島市, 保母1982.7.21)

著者の心をとらえた、ほほえましい三枚の写真が送られてきた。

写真①丸い筒状の輪です。子どもは、すぐに気がつくようです。足にはめたらどんなもんだろう。さっそく実行です。

写真②バシャーとスベリ台の上から水をまく。下の子は、それを待っている。上の子ども、下の子ども大喜び、その両者の呼吸が、素晴らしいのです。

写真③こりゃおもしろい。何と言ったらいいのだろう。やっぱり「名のない遊び」だ。自由がいい、子どもが思い切った遊びをする。保母さんの見守りが大変だけどね。

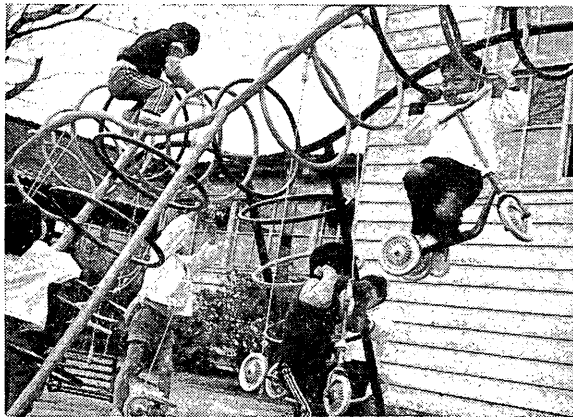
写真1



写真2



写真3



(23) 村本 宗和(熊本県熊本市 園長, 1981.1.1)

年賀状が、著者あてに送られて来ました。村本園長とのつきあいも長く、日頃、理想とする保育理念を語り合うことや、また、園訪問の機会もあり、よく知っているだけに、園長の保育の姿勢が一目で読みとれ、大喜うれしかった。

また、これは年賀状である。広い範囲の人々に、自分の良しとする保育、あるいは、児童観を、堂々と示していける信念に強く打たれた。

かまえた形ではなく、日常を通じて行う、保育者の、見識ある保育についての一つの啓蒙運動ともいえるだろう。保育者は、かくありたいものである。

また、この年賀は、ただ、かわいいというものではない。この裏には、こうした「名の無い遊び」を、共に喜べる大人たちが周りにいるという事実である。そのことがよくわかるだけに、一層、心強いものを感じる。

写真4



㉔ 椎名 久美子(千葉県印旛郡, 保母, 1981.7.2)

一葉のハガキが、著者に送られてきた。淑徳大学の昭和55年度の卒業生である。

「毎日、悪戦苦闘です。今、2才児を担当しています。何をしてもかわいいさかりです。

Tシャツを、前と後を逆にして着ている子に『前と後、反対だね、絵がついている方が前よ』と、保母が言うと。

『ウウン、クマさんをおんぶしているの』と返事がかえってきました。この遊び!!!

楽しい毎日です。」

㉕ 阿由葉 恭子<sup>(2)</sup>(東京都中野区, 主婦, 1982.10.6)

≪息子の語るメルヘン楽しむ≫

今日も私は幼稚園児の息子が、私をメルヘンの世界に連れて行ってってくれるのではないかと、楽しみにしています。

というのは、ある日、息子とその友達が玄関の前にレジャーシートを広げ、その上にあお向けに寝ころがり、にこにこしながら割り箸(わりばし)を持った手を、何回も高く上にあげては口の側に持っていく動作を繰り返しています。不思議に思って聞いてみますと、「綿菓子を食べているんだよ。いっぱいあるよ」と言います。「エーッ」と聞き直しますと、「空だよ、空を見てごらん」という返事。言われて見上げると、澄みきった青空に、ふわふわした丸い雲が、点々と並んで浮かんでいました。

じっと見ていたら、口の中にふわあっとしたかすかな甘みを感じ、おもわず、「おいしそうね」と言いますと、子供たちはお互いの顔を見合わせて、ほほえんでいました。

また、ある晩のこと、急に「ママ、虫たちが、ワッショイ、ワッショイと、何かかついでいるよ。多分、はた織りに使う糸を運んでいるんだね」と言います。何の事かわからず、子供の顔を見ますと、「ほら、耳をすましてごらん。虫がワッショイ、ワッショイと鳴いているでしょう」とまじめな顔をして言います。ああそうか、虫の音がこの子にはそう聞こえるのかとわかり、庭の虫の音を聞いてみますと、他の虫の音にまじって、どこからか、ワッショイ、ワッショイと何かを運んでいるような虫の音も、聞こえるようでした。

日常の何でもない事が、子供の目や耳を通すと、こんなにも生き生きと、新鮮に感じられるものかと、驚きさえ感じられました。

(26) 田 鎖 貞 子<sup>(3)</sup> (神奈川県横浜市, 主婦, 1981.1.19)

『遊びに来ていた孫が、トイレに入ったきりなかなか出て来ない。どうしたんだろう、と思いつつ、のぞいてみたら、お尻を出したままトイレットペーパーを全部ひっぱり出して…。「くさいところでカミとたわむる」というところね。』

(著者後記) どの家庭でも必ず思いあたるはず。日本中の、いや、世界中の子どもがする遊びの一つ。

写真5



いたずらっ子  
遊びに来ていた孫が、トイレに入ったきりなかなか出て来ない。どうしたんだろう、と思いつつ、のぞいてみたら、お尻を出したままトイレットペーパーを全部ひっぱり出して…。「くさいところでカミとたわむる」というところね。

田鎖貞子 著 58頁 主婦・あまのこ出版

## 5 著者の提出事例

(27) 野中保育園(静岡県富士宮市 1982.9.2)

かむことが好きだ。1歳児クラスの子。

写真⑥ホースをかむ。力を入れてかむ。

写真⑦パンツをぬいで、そのパンツをかむ。そのまま、パンツをくわえて歩いている。

写真⑧ロープをかむ。複数で遊ぶ縄とび用のロープである。4mほどあるが、くわえて、ひきずって散歩をしている。

写真6

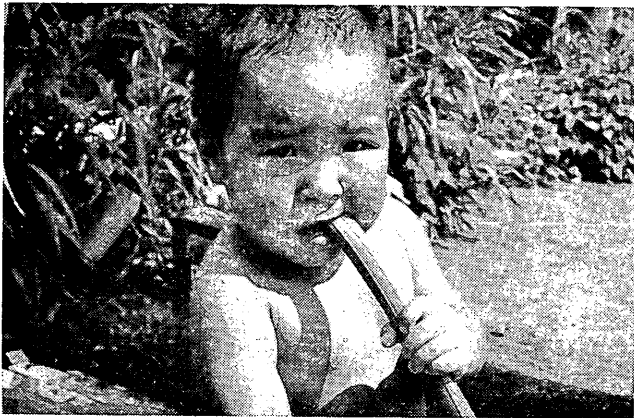
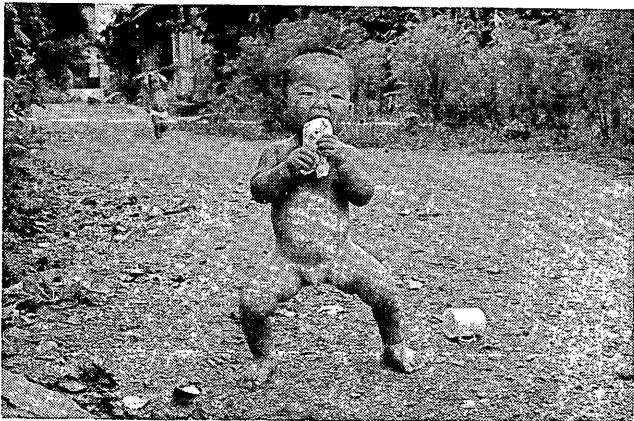


写真7



その他、年長(5歳児)ぐらいになると、毛布をくわえてジャングルジムへ登ったりする。午睡用のまくらをくわえて遊ぶことも多い。

子どもは、遊びに、口もよく使うものである。

写真 8



⑳ 野中保育園(静岡県富士宮市 1982.9.2)

写真㉑㉒は、底抜けバケツであるから、水をくむと、バシャバシャともれる。プールサイドにバケツをおくと、穴から勢いよく水がもれる。

その瞬間である。なんの躊躇もしない。実に、自然に、さっと、口をすり寄せて口にふくむ。四人の子が、かわりばんこに、競って飲み(とは言っても沢山は飲んでいないが)、あるいは、口にふくんで、外へ飛ばす。

笑み満面、ケラケラと笑いころげて、続ける。バケツの水は、プールから何回もくむ。

写真 9



写真10

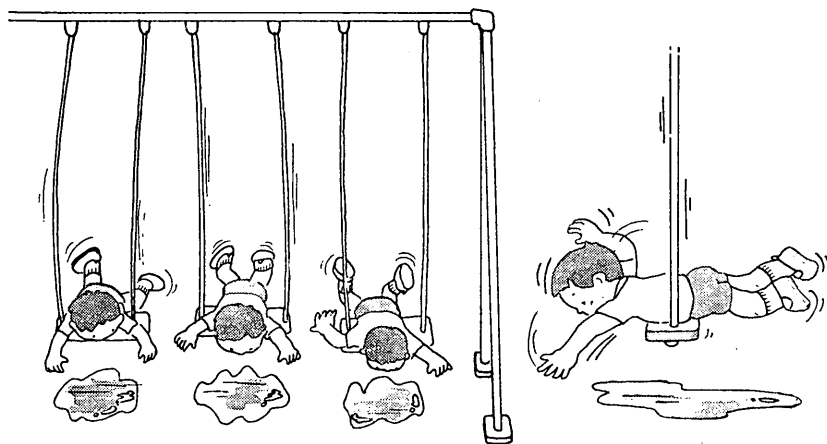


㊸ 黒田小学校(静岡県富士宮市 1982.7.20)

小学生3年生の男の子が、3人。ブランコに腹ばいに寝てのっている。

ブランコの下は、雨上がりのことで、水たまりになっている。それが、スリルになっているのだが、ぬれないように、身体と地面は水平になるように、バランスをとって、ゆすっている。手は、どこにもつかまらない、空を泳いでいるかっこうである。

(29)図



「ホレ、ホレ」とか「ヤバイ、ヤバイ」と言いながらも、三人とも落ちたりしない。さながら宇宙遊泳のごとくでもあった。笑っている。

#### IV 5年間の研究経過・考察の推移

1 1977年12月10日脱稿(1978年3月発行)『淑徳大学研究紀要 第12号』<sup>(4)</sup>(淑徳大学)

1) テーマ 保育内容の基礎理論(1)

「名のない遊び」の研究

2) 内容

(1) はじめに

(2) 「名のない遊び」とは何か。「名のない遊び」の取り出しについて

① 著者の観察

② 宮口しづえの観察

③ 土田洋之の考察

④ 五味太郎の科学絵本「みんなうんち」の編集後記の一文について

(3) 「名のない遊び」の重要性

① 「芽ばえ」について

② 経験学習について

③ レディネスについて

(4) カリキュラムとの関係

(5) 幼稚園教育要領・保育所保育指針の運用と「名のない遊び」について

(6) 視点呈示に関するさまざまな実際例

① 実際例1 “12橋”とも呼びたいもの

② 実際例2 岩で暖をとる子ども

③ 実際例3 大人の靴をはいてお散歩

④ 実際例4 大型積木による5段ベット

⑤ 実際例5 コップの上に箸箱をのせ、その上に弁当箱をタテに

⑥ 実際例6 転覆した乳母車で

⑦ 実際例7 里いもの大きな葉と水玉

⑧ 実際例8 自転車が砂場で立ち往生

(7) 新しい実験 - 「名のない遊び」の創造と遊具の開発 -

(8) むすびに

(9) 註記・引用文献

2 1978年4月20日, 『討論幼児教育』<sup>(5)</sup>(日本放送出版協会)

1) テーマ 大地保育



2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

(1) 名のない遊び

新事例紹介-奇妙なシーソー, 写真7枚使用

3 1978年5月21日, 『日本保育学会(第31回大会)<sup>(6)</sup>』(香川大学)

1) テーマ 保育する目をいかに創るか-保育のコツを探る-

2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

(1) 子どもをとりまく保育環境を中心に, 保育者が保育する目のつけどころとは何か

- ① 保育環境とは-educate(引き出す)こと-
- ② 半管理空間(非視覚的保育空間)の必要性-心で見ている管理-
- ③ 名のない遊び-①および②から, 多く創造される-

4 1978年7月19日発表(1979年2月15日発行), 『学内講演会・淑徳大学教養講座<sup>(7)</sup>』(淑徳大学)

1) テーマ 児童の生活の原点

2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

(1) 保育記録と「名のない遊び」-非言語系の世界-

(2) 家庭の協力と「名のない遊び」

- ① 千葉県佐倉市中央公民館「親子あそび教室」より
- ② 新事例紹介 ① サビオ(傷絆創膏)とくずかご  
新事例紹介 ② 串だんごの串とお皿

(3) スキンシップの真髓と「名のない遊び」

- ① 子どもと共存の姿

5 1978年11月1日から1979年3月1日まで, 5回連載『幼児と保育<sup>(8)</sup>』(小学館)

1) テーマ 名のない遊びの研究(1)~(5)

2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

(1) いま, 保育で忘れられているもの

- ① 保育に無限な可能性を呼びもどすために
- (2) 子どもにとってかかせないもの
- (3) 子どもの遊びの系統性を考える
  - ① 子どもが興味や欲求を示す対象は
- (4) 子どもの遊びに躍動をとりもどせ
  - ① カメラ技術と文章力-行為の世界のとらえ方-
  - ② 子どもたちの手に主体的な生活を返す
- (5) 子どもと共存していますか

6 1979年1月1日, 『保育ノート(1月号)<sup>(9)</sup>』(チャイルド本社)

1) テーマ 幼児にとって考えるということは

## 2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

(1) 幼児に考える場を保障するために

- ① 考える力を奪うネックは何か
- ② 禁止の王様はどろんこ遊び
- ③ 発想の自由を

7 1980年5月17日、『日本保育学会(第33回大会)<sup>(10)</sup>』(西南女学院短期大学)

1) テーマ 保育環境論(9) 'the Nameless Plays' の受容と保育空間について

## 2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

- (1) 目的
- (2) 'the Nameless Plays' とは
- (3) 「かくれる」「見えない」という保育空間
- (4) 「きたない」「ちらかかっている」という保育空間
- (5) 「我を忘れて」「無心に」ということ
- (6) 動物がいるということ

8 1980年9月1日、『芽(9月号)<sup>(11)</sup>』(誠文堂新光社)

1) テーマ 名のない遊び—子どもの夢と造形—

## 2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

- (1) 名のない遊びの定義
- (2) 村田和子の講評

9 1981年5月23日、『児童研究(第60巻)<sup>(12)</sup>』(日本児童学会)

1) テーマ シンポジウム「子どもの遊びと冒険」

## 2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

- (1) 子どもらしさの認められる生活
- (2) 自由な教育形態
- (3) 大切な原体験—ナイーブな体験—

10 1981年6月1日、『保育の友(6月号)<sup>(13)</sup>』(全国社会福祉協議会)

1) テーマ 梅雨時の保育のすすめ方

## 2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

- (1) 梅雨と子どもの共存—雨とのつきあいの必然性, 傘をさして遊ぶ, 発想の転換—
- (2) 自然とともに—自由さを失った形式主義者のおとなには, 梅雨と取り組む発想が生まれてこない—

11 1981年9月30日、『愛育心理研究(第6号)<sup>(14)</sup>』(愛育心理研究会)

1) テーマ 名のない遊び

## 2) 内容(本稿に必要な部分のみ)

- (1) 子どもを愛するというこゝろ—子どもの人格を尊重する—
- (2) 大人の反省
- (3) やったことないことが大切
- (4) 国分康孝講評（東京理科大学教授 哲学博士）
- (5) 綾谷経雄講評（神奈川県立白山高等学校教諭）
- (6) 山岡寛章講評（教育評論家）

12 1982年9月1日、『保育とカリキュラム(9月号)』<sup>(15)</sup>(ひかりのくに)

- 1) テーマ メルヘンのある保育を
- 2) 内容（本稿に必要な部分のみ）
  - (1) 名のない遊び—子どもを知る—
  - (2) 創造性豊かな子に
  - (3) ユーモアのある保育

13 1982年、本稿をもって「名のない遊び」の研究を終了する

## V 「名のない遊び」の研究総括

### 1 はじめに、記述形式についての了解

先述の、5年間の研究経過・考察の推移では、著者の発表年代順に、本研究の終了を意味する本稿も含めて、大小の13の作品がある。この順を追って考察は推移するわけであるが、いま、各作品を整理してみると、発表雑誌等の性格上、記述形式、特に用語にかなりの差がみられ、同等にはそのまま扱えない一般向けの読み物も含まれている。しかしながら、考察の推移をみる上では、有効であり、抜くことをやめた。

また平易な語りかけの、一般保育者および家庭向けの作品においても、その本質の求追という点では、十分たえられる作品だと確信している。

なお、了解いただきたいことは、著者が意識して、難しく言わない、また、難かしく表現しないと、心がけたこともたしかである。

それは、第一には、子どものかわいらしさや、柔軟な生活の流れ、そして、メルヘンの世界等の感じを保持したかったからである。難かしく書くと、子どもの表情が消えてしまうからである。

第二には、広く世論に問い、啓蒙の役割も果たしたかったからである。保育を実際に進めている若い保育者、そして、家庭の両親に読んでもらうことが、保育に変化をもたらし、子どもの幸せをつくると考えたからである。

### 2 必要性の総括

#### (1) 理念的な側面から

- ① 子どもの人格尊重の具現化である。大切なことは、子どもの生活の自治であり、子ど

もは自らの人生の、いまの、主人公となるべきである。そこに「名のない遊び」の必要性がある。

② 自主性・主体性を育てる為に必要である。「名のない遊び」は、大人によってやらされたものではない。いづれも子どもが自発的に始めたものである。そこに価値がある。

その結果として、創造性や個性が育てられる。

③ 誰れにでも理解しやすい形で示すことができるので、方法論として、自由保育の直接処遇技術の確立に役立つ。

④ 破壊、あるいは、不道徳な盗みなども含めた、「負の体験」をすることがあり、人格形成上必要な精神内面の複雑な経験にメスを入れることができる。

## (2) 保育技術的な側面から

① 保育者は、遊びに名命することで安心してしまう。「何々遊び」をしていると名命して、それで説明がついてしまうので、その後は子どもを見守ることをおこたりがちである。ところが「名のない遊び」は簡単に説明がつかないので、子どもに何が起っているのだろうか、保育者に十分に保育を考えさせる。

② 総合的活動なので優れている。幼稚園教育要領には、幼児の保育の特質として、総合的であるかどうかを問うている。その主旨に「名のない遊び」は合っている。

③ 子どもと遊びの共存である。子どもの側の十分な動機で行われるので、いつも真剣勝負の保育になる。いわゆる「しらけ」ということがない。

④ 無意識な子どもの行動も発現するので、子どもの心の中を理解することができる。そして、こうした行動の受容こそが、子どもの精神生活を大切にしている保育といえる。

## 3 将来への取り組みの総括

### (1) 新しい実験－「名のない遊び」の創造と遊具の開発－の総括

「名のない遊び」の研究の第1論文<sup>(4)</sup>で、仙田満らの“具体性に欠けた遊具”の実験を紹介した。その際、実験途中のことでもあり、次の機会に結論を報告することになっていた。長い間、心にかかっていたので、ここで最終的に処理しておきたい。

固定遊具としては、著者らの常識を完全にくつがえした。普通は木材、鉄パイプ、コンクリートを主材質とするのに対し、ダンボール、ロープ、強力接着材であった。

この壊れ易さが、多くの「名のない遊び」を発生させた。最も、感心したことは、壊れたら修理する遊びを、子どもたちが始めた時である。

第1論文<sup>(4)</sup>でも、すでに①ロケット発射 ②基地ごっこ ③チャンバラ ④お神輿 ⑤ロボットの手 ⑥お山の大将（ジャングルジム風で使用）等、の遊びの発生を報告したが、その後、分解された1ツ1ツのブロックを、大形積木風を使用して、原形をとどめなくなっても、遊びは新しく創造されていた。

設置後、約3ヶ月で、完全に壊れたので、この遊具とのお別れのパーティを、園庭で行っ

た。それは、バラバラになってしまった、こわれたブロックを山に積んで、全園児で火の祭をして、弔い、お別れしたのである。

生き物の死に出合ったのと、同じ心境であった。それほど、子どもたちの生活になじみ共存していたのである。

なぜ燃やしたのかは、ダンボールであるため、ボロボロにむしれ、園舎内および園庭のいたるところにちらかり、きたないと誰の目にも感じられるまでになったので、保育者がこの遊具の使用の限界であると判断したからである。

いま、著者らは、この“具体性に欠けた遊具”の経験から、固定遊具の発想の転換を学ぶことができた。

## (2) 事例研究の取り組みの総括

著者は、現在約 300 事例を収集した。本稿においても、代表的な事例を許される限り多く掲載した。今後、「名のない遊び」の研究の生命は、豊富な事例の整理にかかっているといい。何よりも事実から始めるべきであり、事実に戻る以外に、誤りを犯さぬ方法はないからである。

本稿をまとめるにあたって、実に沢山の事例を読んだが、すると、ずい分類似性のあることに気付いた。

たとえば、ブランコに乗ると、多くの子が靴を飛ばしたいという感情を起すようだ。

また、噴水での水とばしの遊びの報告は、実に多いことに気づく。

また、電車の中では、子どもは必ず、何にもつかまらず、誰が一番長く立っているかと、走っている電車の揺れに挑戦するものらしい。この事例も実に多く報告されている。

著者が、最も感心した事例は、本稿のⅢ、「名のない遊び」の実際、新しい事例の追加に掲載した、(9) 拝原淳子の収集した事例である。

「名のない遊び」には無意識が関与していること、子どもの精神生活を大切にする直接処遇技術であることを、みごとに証明している。実に、ほのぼのとした心の安まる事例であった。

こうした子どもの姿の事実の取り出しは、これからの保育を正しい方向に、必ず導くことになるだろう。

## Ⅵ む す び

自由保育と一斉保育のはっきりとした違いは何か。「名のない遊び」が有るのか、無いのかでわかる。これが、著者の最初の直観であり、証明すべき仮説であった。この仮説は、ほぼ完全に証明できたと思っている。

さらに、「名のない遊び」の存在は、子どもの人格尊重の証しなのだから、自由保育の正しさも証明できたことになる。

仮りに、ある園を訪ねたとしよう。一日、訪問して、帰帰りまでに、一つも「名のない遊び」

を見ることができなかつたでしょう。著者は、その園にも、その保育にも何の魅力も感じない。そして、ひたすら恨むであろう。子どもの人格が無視されていると。

さて、著者は、5年の間、まとめなければと気を使いとおした本稿が完結し、いま、出来、不出来にかかわらず安堵している。とにかく良かったと心から思う。そして、多くの方々に感謝の気持でいっぱいである。

著者の記念講演の掲載された『愛育心理研究(第6号)<sup>(14)</sup>』を、死の床に呻吟しながら編集され、完成とともに亡なられた、尊敬してやまない教育評論家の山岡寛章先生を思い出す。あの記念講演の日も「生を明らめ死を明らむ」と語られ、病院から許しを得て来られて使命を果されていたと聞いていた。それが、著者との最後の出会いとなった。山岡先生からいただいた、「その目線を子どもにもっていったからこそ、塩川寿平の講演、名のない遊びが生まれたのである。」という講評を、大切にしたいと思っている。

また、5年の長きに渡った研究の過程には、スランプもあり、しばしば針路を見失うこともあったが、恩師の貴重な励ましの言葉に救われた。そして、その度に、私は心ふるいたち、研究の完成をみる事ができたといえる。

東京理科大学教授の国分康孝先生からは「技法を越えて、私たちの人生観・教育観の再検討を迫るものがあつた。」と講評いただいた。大妻女子大学教授の千羽喜代子先生からは「いつも新鮮な目で驚きます」と励ましの言葉をいただいた。また、第1論文以来御指導いただいた大妻女子大学教授の平井信義先生からは“同志”とまで呼んでいただいた。そして、日本社会事業大学教授の石井哲夫先生には、機会あるごとに研究進行上の助言をいただいたのである。

なお、資料提供の上では、多くの方々の御協力を得たが、中でも、なんといっても本学教授の笠井清先生の尊いお時間とお手を煩わせた。本稿Ⅲの事例(3)の「特記」で使用させていただいた資料は、昭和25年、先生が高等学校1年生の折に書かれた貴重な作品である。また、英文の要旨については、本学教授(英語学)の松浦康有先生に、お忙しい中、心温まる御指導をいただいた。ほんとうに感謝の念でいっぱいである。

最後に、保育者の皆さんや、学生諸君に、御協力を心から感謝する。子どもの笑顔を忘れない論文にしたいと心がけてきたが、皆さんと共に学んだ楽しかった事例研究の時もまた大切にしていきたい。

本研究を終るにあたって、私は、いま新たに、これを一つのステップとして、一層、子どもの人格尊重の保育と研究をしていきたいと決意している。

1982年10月14日(木)

淑徳大学 児童福祉研究室にて 著者

## 註記・引用文献

- (1) 笠井清「輝きを失った水滴」,『竹馬(群馬県立高崎高等学校 1年4組)』昭和25年3月
- (2) 阿由葉恭子(主婦・38才・東京都中野区)「息子の語るメルヘン楽しむ」, 朝日新聞投書欄『ひととき』昭和57年10月6日
- (3) 田鎖貞子(主婦・58才・横浜市港南区)「いたずらっ子」, 毎日新聞 写真投稿欄『私のケッサク』昭和56年1月19日
- (4) 塩川寿平「保育内容の基礎理論(1)『名のない遊び』の研究」,『淑徳大学研究紀要(第12号)』淑徳大学 1978年3月
- (5) 塩川寿平「大地保育」, 横地清 多湖輝 中沢和子 塩川寿平 塚越恒爾『討論幼児教育』日本放送出版協会 1978年4月20日
- (6) 塩川寿平「子どもをとりまく保育環境を中心にー保育者が保育する目のつけどころとは何か」,『日本保育学会(第31回大会)シンポジウムⅡー保育する目をいかに創るか, 保育のコツを探るー(司会)利島保(パネラー)立川多恵子 塩川寿平 小川博久 合田一枝 大西祥子 土山汀 泉加津子』香川大学 1978年5月21日  
\* 特記, このシンポジウムの内容は, 1978年10月1日,『保育ノート(10月号)』(チャイルド本社)に再録された。
- (7) 塩川寿平「児童の生活の原点ー大地保育の理論と実践ー」,『学内講演会・淑徳大学教養講座(昭和53年度)』淑徳大学学生委員会編集 淑徳大学発行 1979年3月27日
- (8) 塩川寿平「名のない遊びの研究(1)~(5)」,『幼児と保育(第24巻・第11号~第24巻・第15号)』小学館 1978年11月1日~1979年3月1日 5回連載
- (9) 塩川寿平「幼児に考える場を保障するために」, (特集)幼児にとって考えるということは,『保育ノート(第27巻・第1号)』チャイルド本社 1979年1月1日
- (10) 塩川寿平「保育環境論(9)『the Nameless Plays』の受容と保育空間について」,『日本保育学会, 第33回大会, 研究論文集』西南女学院短期大学 1980年5月17日
- (11) 塩川寿平「名のない遊びー子どもの夢と造形ー」,『芽(第1巻・第6号)』誠文堂新光社 1980年9月1日
- (12) (シンポジスト)大村虔一 高橋系吾 斉藤歎能 塩川寿平 (司会)天野嘩「子どもの遊びと冒険」,『児童研究(第60巻)』日本児童学会 1981年5月23日
- (13) 塩川寿平「梅雨時の保育のすすめ方」,『保育の友(第29巻・第6号)』全国社会福祉協議会 1981年6月1日
- (14) 塩川寿平「記念講演, 名のない遊び」,『愛育心理研究(第6号)』愛育心理研究会 1981年9月30日
- (15) 塩川寿平「メルヘンのある保育を」,『保育とカリキュラム(第31巻・第9号)』ひかりのくに 1982年9月1日

## A Foundational Theory of the Nursery Care (2)

### —A Study of ‘the Nameless Plays’ (concluded)—

by Juhei SHIOKAWA

1. This study is one of the foundational theories of the nursery care; its object is chiefly babies and infants who are not old enough to go to primary schools.
2. This is a summary of my studies for the past five years (December 1977 to October 1982).
3. The term ‘the nameless plays’ used very often as the key word in this study was originated by the author. By ‘the nameless plays’ I mean the image of infants as independent existences or the positive users of rights. In other words, ‘the nameless plays’ imply that infants themselves form their own lives through plays. Therefore, these plays are very important in that we must respect the personalities of infants when we raise them with the theory of the nursery care and its techniques combined. However, these plays have no name. No matter how hard I have tried to give them a name, it has been impossible for me to find a suitable “word” for these plays and express in so short a “sentence”. That is why I have to call them ‘the nameless plays’.
4. The purpose of this study is fourfold:
  - (1) to find ‘the nameless plays’;
  - (2) to prove the significance of ‘the nameless plays’;
  - (3) to warn against the combined teaching that is not only standardized but also formal;
  - (4) to insist upon the importance of free-method teaching that promotes ‘the nameless plays’.
5. The method of this study is based upon the case-studies.
6. The summary:
  - (1) Why ‘the nameless plays’?
    1. These plays are the originality of infants.



2. These plays are the expression of infants' unconscious needs.
3. These plays are the very sensibility itself enjoyed by infants with their five senses.
4. These plays are synthetic activities of some plural plays.
5. These plays are not the ones played for some special purpose from the beginning.

Thus, 'the nameless plays' are all the more full of variation and are still not to be given a name because the above-mentioned appears in much complicated unity.

(2) Why are these plays so important?

A: From the theoretical viewpoints

1. These plays are the nursing of the infants' personalities.
2. These plays should be played of infants' own free will and spontaneity. As a result of it, infants' creativity and personality are developed.
3. These plays are the establishment of one of the ways of free nursing.
4. These plays are the uniformity of the theory and techniques.

B: From the technical viewpoints

1. According to these plays, those who raise infants can think of what is going on with them.
2. In these plays, the motivations of the infants are fully taken up and the plays coexist with the infants.
3. In these plays, the infants' sense of humor or their unconscious needs are taken up and their mental life is highly valued.
4. These plays are synthetic activities very much suited to the infants.